書きことばにおけるParalanguage機能
―感覚記憶への導き―

株式会社イルムスジャパン　八　木　　英　理　子
信州大学　小　林　　比　出　代

はじめに

本研究は、書きことばにおけるParalanguageに関して豊口[1]、押木他[2]の先行研究をふまえた上で、新たに書き手及び読み手が意識するParalanguage要素を明らかにするものである。特に、他者と共有しにくい感覚である味覚に着目することで補足的に働くParalanguage機能を捉え、書きことばによる伝達の可能性を探る。

本研究では、食品名を文字で表す場合の、書きことばにおけるParalanguageを意識的に用いた味覚表現と読み取りの可能性を探究すること、及びその際に機能するParalanguage要素を明確にすることを目的とする。研究の出発点は商品パッケージへの疑問にある。パッケージに示されている商品名等の文字は、商品によって様々な字形が使用されており、また、商品ごとに異なる字形が使い分けられている。このことから、書かれている内容とともに文字の外見的要素にも商品内容に関する何らかのメッセージが付加されていると推測ができる。特に、食品はその価値として味が重要視されることから、使い分けされた文字の外見的な要素には、少なからず味を想起させるものが含まれると考えられる。筆者は、具体的に文字のどのような外見的要素が刺激となって読み手に影響を与えているのか疑問を持った。押木は、文字の外見的要素は音声言語におけるParalanguageに類する機能を有するとしている[3]。本研究では、味覚という感覚に着目し、書きことばにおけるParalanguageとその機能を書き手と読み手の意識を通じて考察する。

なお、本研究では、書き手及び読み手のParalanguageに対するアプローチに関する調査を行っている。これは、書き手（発信者）から見るParalanguageと読み手（受信者）から見えるParalanguageを比較することで、書きことばにおけるParalanguageの機能がより明確になると推考したことによるものであり、当該の調査はParalanguageによる伝達の正確さを追求するものではないことをお断りしておく。

1. Paralanguageとは

1－1　書きことばにおけるParalanguageの存在

Paralanguageとは、従来音声学の分野で研究されており、声のトーンやボリューム、イントネーション等、主に「話す」という言語行動に伴って起こる非言語の動作を指すことが多い[4]。Paralanguageは、言語というツールでは表していないもしくは表しきれない内容や意味、情報等を補足的に付加している。Paralanguageを用いた感情表現は話しことばで可能とされ、書きことばでは困難とされてきた[5]。書きことばにおけるParalanguageやその機能についての認知度は低く、否定的にも捉えられてきたのである。しかし、押木は、言語によるコミュニケーション構造を考えると、文字言語においてもParalanguageもしくはそれに類する要素が機能している可能性が十分あり得ると考察している[6]。また、近年の美文字ブームやはやり文字の存在を考えれば、書き言葉においてもParalanguageが意識的に利用されており、書き手の態度や魅力として読み手に影響を与えていると想像できる。このことから、Paralanguageは話しことばだけでなく書きことばにおいても存在すると考えられる。以上をふまえて、本論考では言語と認識されるものを総じて「Language」と呼び、言語という媒体を通じて姿を現す非言語にあたるものを「Paralanguage」と呼ぶこととする。

文字言語では、音声言語におけるParalanguageの要素であるトーンやボリューム、イントネーションに相当するものとして、文字の太さや色、払いやはねの在り方等が挙げられる。また、手書き文字は、文字言語の中で

もより多様なParalanguage要素を有していると考えられる。手書き文字におけるParalanguage要素の詳細については「1－3」で述べることとする。

1－2　ParalanguageとLanguageの関係性

Paralanguageは言語という媒体を通じて姿を現す非言語であるとの性質から、ParalanguageとLanguageは不可分に結びついていると考えられる。音声や文字はこのLanguageとParalanguageから成り立っており、多くの場合はそれぞれに何かしらの意味を持ち合わせている。Language及びParalanguageにおける意味は、発信者によって添えられている場合と添えられていない場合があり、受信者によっても汲み取られる場合と汲み取られない場合がある。

Languageは、それぞれの文化である程度一般的な規則に従って用いられる。これは、Languageが何百年にも渡って社会や文化と共に意味を蓄積してきたことによる。ほとんどの場合は、発信者が伝達したい内容に合致した意味を持つLanguageを意識的に選出し発信する。一方、Paralanguageは、Paralanguage要素やその度合い、コミュニケーションの相手との関係、自身の思考等、あらゆる要素が刺激となり、意味の付加解釈の幅を広げる。手書き文字に至っては同一人物が書いたものでも全く同一のものは現れない。このようにLanguageよりも加味すべき要素が広く、現代ではそれぞれに規則的な意味づけがなされていない。また、発信者の意識に関わらず受信者になんらかの解釈を与えてしまう場合もあることから、Paralanguage要素やその解釈の幅は各人の想像力にかかっていると言える。書きことばにおけるParalanguageはLanguageに比べると抽象的で、ことばという形をとりながら言語と芸術の分野に跨って存在している。本研究ではParalanguageの言語的機能に着目し調査を進めることとする。

1－3　書きことばにおけるParalanguage要素

豊口は、

> 書き言葉（手で書かれた文字や言葉）の非言語メッセージとしての要素を簡単にまとめれば、「文字の大きさ」「点画の太さ」「字間」「行間」「行の中心」「行頭・行脚の位置」等であろう。（これらはおおよそワードプロセッサにおける書式設定にあたる。）そして、これらは言語メッセージの意味に直接的あるいは間接的に影響を及ぼすと考えられる。（中略）そして、これらのいわゆる外見的要素は、「感情」を表出したり、書き手たる「人物」の「印象や魅力」と結びついてコミュニケーションの中で機能する。

と述べている[7]。さらに、清水・押木は「言語の内容から受ける印象と書き表す文字から受ける印象が一致したときに言葉の内容をより効果的に伝えられる」と記している[8]。両者とも、書きことばにおけるParalanguageの存在を示唆しており、その機能について明記している。以上のことから、書きことばにおいても、音声と同様な、もしくは類似したParalanguageの存在が示唆される。

また、押木他は、書きことばにおけるParalanguage要素を「線」「字形」「配列」の大きく3つに分類している[9]。以上を参考に、本論考では書きことばにおけるParalanguage要素を【Ⅰ-Ⅰ】のように類別する。なお、インクや墨を用いた筆記具には、「線」に潤渇等の表現要素が加わる。その他、インクや墨による飛沫もParalanguage要素に含む。

以降は、これらの要素に音声言語におけるParalanguageの研究の在り方を応用することで、書きことばにおけるParalanguageの位置づけを明らかにする。

【Ⅰ－Ⅰ】・線（太さ、色、濃さ、テクスチャのようなもの、潤渇、強弱、軽重）
・字形（点画の長さ、方向、間隔、曲直、接し方、交わり方、部分の組み立て、一字の概形）
・配列（書字の方向、文字の方向、字間、行間、行のゆれ、字配り、紙面全体の配置）
・その他（飛沫）

【Ⅰ-Ⅰ】に列挙した書きことばにおけるParalanguage要素を、日常で用いる筆記具と調査で用いる筆記具

ごとに分類したものが右記の表1である。本論考では書きことばにおけるParalanguageの分類法を次のように定める。

①【Ⅰ-Ⅰ】をもとに、各筆記具を用いた場合に表れるParalanguage要素をまとめる。

②①でまとめたParalanguage要素を、主に筆記具そのものが保持している「外的要素」と書き手の心理的・技術的差異によって影響を受けやすい「内的要素」に大別する。

表1　Paralanguage要素の分類

鉛筆

外的要素	内的要素	
・色 ・テクスチャのようなもの	・太さ ・濃さ ・強弱 ・軽重 ・点画の長さ ・線の方向 ・間隔 ・曲直 ・接し方 ・交わり方	・部分の組み立て ・一字の概形 ・書字の方向 ・文字の方向 ・字間 ・行間 ・行のゆれ ・字配り ・紙面全体の配置

万年筆

外的要素	内的要素	
・色 ・濃さ ・テクスチャのようなもの ・潤渇	・太さ ・強弱 ・軽重 ・点画の長さ ・線の方向 ・間隔 ・曲直 ・接し方 ・交わり方 ・部分の組み立て	・一字の概形 ・書字の方向 ・文字の方向 ・字間 ・行間 ・行のゆれ ・字配り ・紙面全体の配置

シャープペンシル

外的要素	内的要素	
・太さ ・色 ・濃さ ・テクスチャのようなもの	・強弱 ・点画の長さ ・線の方向 ・間隔 ・曲直 ・接し方 ・交わり方 ・部分の組み立て ・一字の概形	・書字の方向 ・文字の方向 ・字間 ・行間 ・行のゆれ ・字配り ・紙面全体の配置

毛筆

外的要素	内的要素	
・テクスチャのようなもの	・太さ ・色 ・濃さ ・潤渇 ・強弱 ・軽重 ・点画の長さ ・線の方向 ・間隔 ・曲直 ・接し方	・交わり方 ・部分の組み立て ・一字の概形 ・書字の方向 ・文字の方向 ・字間 ・行間 ・行のゆれ ・字配り ・紙面全体の配置 ・飛白

ボールペン・サインペン

外的要素	内的要素	
・太さ ・色 ・濃さ ・テクスチャのようなもの ・潤渇	・強弱 ・軽重 ・点画の長さ ・線の方向 ・間隔 ・曲直 ・接し方 ・交わり方 ・部分の組み立て	・一字の概形 ・書字の方向 ・文字の方向 ・字間 ・行間 ・行のゆれ ・字配り ・紙面全体の配置

ボールペン・サインペンは、外的要素に太さ、色、濃さ、テクスチャのようなもの、潤渇が含まれる。これらは特定の筆記具を選択した時点で決定される筆記具保有の要素であり、書き手の意志ではほとんど変化をつけることができない。鉛筆では、色、テクスチャのようなものが外的要素に含まれる。シャープペンシルは鉛筆よりも細い芯を用いることから書き手の意志で太さ・濃さに変化をつけることが難しく、外的要素に含まれる。鉛筆の場合は特定の鉛筆を選択した後に削ったり筆圧を変えたりすることで書き手の意志に従って変化をつけることができるため、内的要素に区別する。さらに、毛筆に関しては鉛筆やボールペン等の筆記具と異なり、必然的に墨や墨液、硯を別に扱うこととなる。この場合、太さ・濃さ・潤渇に加え色をも変化させることが可能になる。このことから、毛筆は前述した筆記具の中で最もParalanguageの内的要素を有していると考えられる。書き手の意志で変化をつけることができる要素を多く持つことは、Paralanguageを意識的に用いる表現活動の際に最も適しているといえる。本論考では、表現要素の高い毛筆を用いて調査を行う。

2. 味覚の視覚化

味覚という感覚は、味覚以外の感覚に依存する部分が大きい。また、食べるという行為が人体へ及ぼす影響は生命の存続に関わるものである。そのため、人間は食べるという行為において多くの感覚器官を介して対象物を知覚する。視覚で食物の形を確認し、嗅覚で食物の発する香りを嗅ぎ、触覚と時には聴覚で食感を感じる。その後に味覚で味を知覚する。各感覚野からの情報が脳内で統合された上で、人間は対象物を認識する。つまり、食べるという行為、またその対象物の認識は各感覚野の情報が集結し構成されていると言える。この行為が繰り返し行われることによって、対象物の「味」に関してより細部まで認識し、その情報を蓄積・上書きしていく。そして、最終的には、見た目や香りだけでどのような味がするのか大まかなイメージを持つことができるようになる。

さらには、「プライミング」という現象も同時に働く場合がある。プライミング効果とは、ある特定の刺激にあらかじめさらしておくことで、それと関係する認知プロセスが促進される効果のことである[10]。例えば、食べるという行為において、味を認識させる以前に視覚や嗅覚等を刺激しておくことにより甘味や苦味等の味覚を増長させることを指す。清水・押木が述べるLanguageとParalanguageの「調和」した際の効果[11]もある種のプライミング効果といえる。つまり、Languageを認識すると同時にParalanguageがLanguageへ関連する感覚記憶に作用し調整されることで、文字の意味理解が促進され、より細部のイメージへと繋がるのである。

視覚情報によって味覚のイメージを発現することは可能である。このことから、上記の食べる行為で機能する効果は、書きことばにおけるParalanguageに応用することができると考えられる。以上のことから、Paralanguageを基にした細かな味覚表現や味覚情報の読み取りは不可能ではないという仮説を立て検証を試みる。ただし、視覚による味覚イメージは、その食経験や感受性及び遺伝的要因によって個人差がある。さらに、Paralanguageはある味覚イメージを発現させる刺激の一つに過ぎず、Paralanguageのみで味覚イメージが決

定されるわけではない。

3. アンケート調査から分析する書き手・読み手の意識

3－1　調査の目的と分析方法

本章では、書きことばの視覚的な意味伝達機能の可能性について調査を試みるために、自分自身と他者との間で共有しにくい味覚を書きことばを用いて表現し、その表現方法や読み取り方法を分析することにより、Paralanguageと味覚の関係性について検証考察する。分析に際しては、特に読み手が着目するParalanguage要素とその読み取り方に重点を置いて行う。

①調査方法とその意図

最初に、筆記被験者から「野菜のトマト」との文字を通常の書きぶりで書いてもらう。その後で「甘い」「酸っぱい」「苦い」の3つの味覚条件を順に提示し、それぞれの味を表現する「野菜のトマト」の文字を書いてもらう。さらに、それぞれの味覚条件をどのように表現したのか、表現意図を言葉で記述してもらう。

調査で用いる筆記具は、鉛筆やサインペン等の硬筆よりも表現の幅が広い毛筆を採用する。用紙は毛筆に適す書道半紙（約332×244mm）を使用する。また、半紙で自由に表現できるように、筆は中筆（毛の長さ約35mm、筆軸の直径約9mm、兼毫筆）を使用する。その際、書体や横書き・縦書き、段落等の形式の指定はしない。以下、筆記被験者に課した質問項目を記す。

1．○「やさいノとまと」と（「やさい」を漢字、「ノ」を平仮名、「とまと」を片仮名で）書いてください。
　○この言葉を書くのに、あなたは何かをイメージして書きましたか。イメージした場合、それはどのようなことかを具体的に記してください。
2．○甘い「やさいノとまと」を（「やさい」を漢字、「ノ」を平仮名、「とまと」を片仮名で）書いてください。
　○どのように工夫、表現しましたか。
3．○酸っぱい「やさいノとまと」を（「やさい」を漢字、「ノ」を平仮名、「とまと」を片仮名で）書いてください。
　○どのように工夫、表現しましたか。
4．○苦い「やさいノとまと」を（「やさい」を漢字、「ノ」を平仮名、「とまと」を片仮名で）書いてください。
　○どのように工夫、表現しましたか。

「野菜のトマト」を調査対象のLanguageとして設定した背景には、次の2点が挙げられる。

・野菜は幅広い味覚イメージを持てる。さらに、トマトは野菜の中でも比較的様々な味を持つ。
・日本語表記に使用する代表的な文字、平仮名・片仮名・漢字の3種類を含んでいる。

「野菜のトマト」と書く際に示した3つの条件は「基本味」[12]と呼ばれる甘味・酸味・塩味・苦味・うま味の5つの味覚の中から選出した。しかし、塩味は「塩でつけた味」[13]、うま味は「アミノ酸関連化合物と核酸関連化合物」[14]であり、代表的なものがコンブだし・かつお節・シイタケであるため、本来のトマトからは抽出されない味覚として本調査の対象外とした。

次に、筆記被験者が書いた「野菜のトマト」の文字から、評価被験者がParalanguage要素をどのようにイメージし読み取るか調査する。具体的には、評価被験者に、先の「野菜のトマト」からどのような味覚が感じられるかを言葉で記述してもらう。評価被験者に課した質問項目を次頁に記す。

1. （各サンプルを示して）どんな味が連想されますか。
2. 1.の味を連想させた要素は何ですか。
3. これまであなたが食べたことのあるトマトの味をすべて書き出してください。
4. 「野菜のトマト」と言われて、最初に思いつく味を教えてください。

なお、評価被験者に提示するサンプルは、それぞれの味覚の条件下で書かれた文字の変化が顕著である3名のものを選出した。ここでの文字の変化の観点は、「1－3」から線・字形・配列の3点とした。使用したサンプ

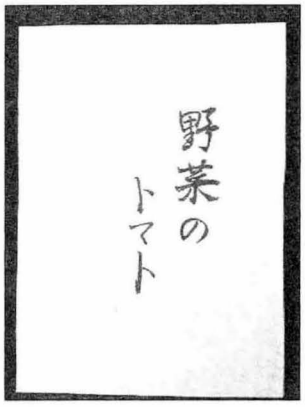
ルを以下に示す。

各味覚サンプル

筆記被験者A

<1>甘い

<2>酸っぱい



<3>苦い

筆記被験者B

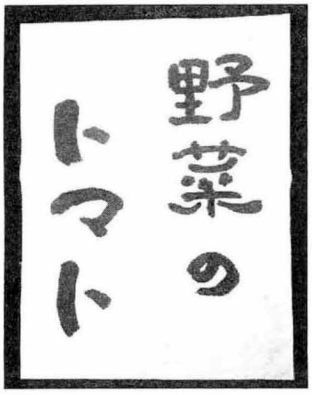
<4>甘い

<5>酸っぱい

<6>苦い

筆記被験者C

<7>甘い



<8>酸っぱい

<9>苦い

②調査対象者

筆記被験者（8人）は、調査時までの1年以内に信州大学教育学部で開講している授業「書道演習」を受講した学生（大学3～4年生）に限定する。毛筆で文字表現をする際、書道経験の差が技能面に大きく反映されることがその理由である。今日では日常生活の中で毛筆を使用する場面は限られている。毛筆を用いての表現は毛筆を使い慣れていない者にとって難易度が高いと考えた結果である。

評価被験者（43人）は、筆記被験者を除く同大学生を対象とする。

③分析方法

各味覚に対するParalanguage要素を用いた表現方法を以下の3項目に従って分析する。

・各味覚に対して筆記被験者が意識的に表現したと考えられるParalanguage要素とその意図の比較
・各味覚サンプルに対する評価被験者のParalanguage要素の着眼点及びその割合
・各Paralanguage要素に対する評価被験者の味覚の読み取り方及びその割合

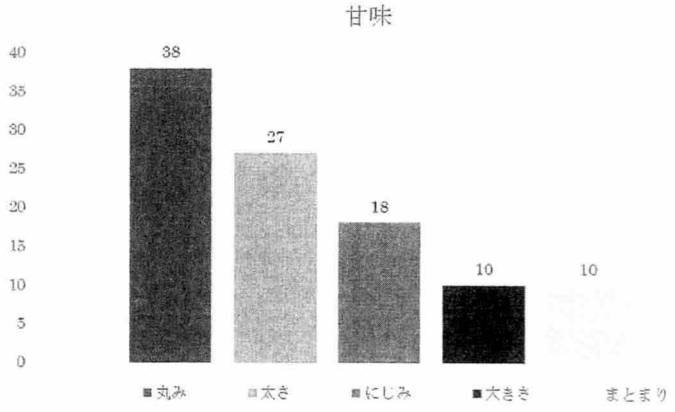
読み手の感覚記憶にParalanguageはどのように機能しているかについても併せて検証する。

3－2　調査結果と考察

○甘味

筆記被験者Aは「野菜のトマト」の甘味を「柔らかいイメージが伝わるように点線（ママ）を丸めに」することで表現している。筆記被験者B・CもAと同様に、「甘い『野菜のトマト』を表現する際は『丸み』を意識した」と記述している。筆記被験者の約9割が甘味表現として「丸み」を挙げており、さらに、そのうちの半数が表現意図として「柔らかいイメージ」が伝わるように書いたと述べている。つまり、書き手の多くは「甘味→柔らかいイメージ→丸み」と思考していることがわかる。

【グラフ1】　評価被験者が甘味を読み取ったとする要素



（評価被験者の回答より5つ以上の回答があった要素のみを表示）

一方、筆記被験者Aによる甘味サンプルから甘味を読み取った評価被験者は全体の3割に留まった。筆記被験者Cによる甘味サンプルから甘味を読み取った評価被験者は全体の約4割、筆記被験者Bによる甘味サンプルに至っては全体の2割を下回る結果となった。

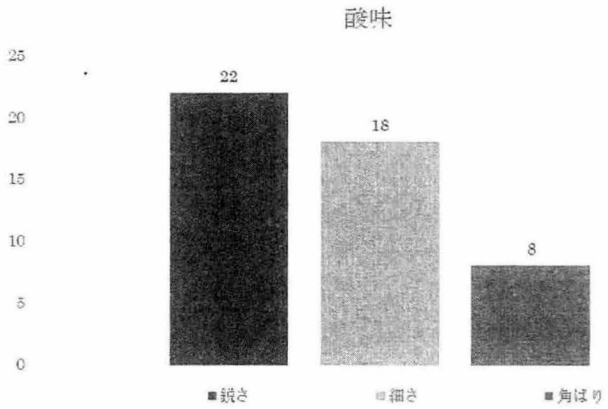
【グラフ1】は、甘味サンプルに限らず評価被験者が甘味を感じるとした全ての回答から甘味を読み取った要素を抽出した結果である。評価被験者が甘味サンプル以外のサンプルからも「丸み」要素に甘味を読み取っていることから、被験者の多くは「丸み」要素から甘味を見出していると考えられる。その反面、書き手の「丸み」の表現力や読み手が「丸み」を感じる部分や度合いによって、甘味が読み取れる場合と読み取れない場合、もしくは異なる味を読み取る場合があることもわかる。

○酸味

筆記被験者A・Cは、酸っぱい「野菜のトマト」を「トゲトゲ」しさを意識しながら線を「細く」「尖らせる」ことで表現したと記している。これに対して、筆記被験者Bは、文字の位置を半紙の中心に集めることで、酸味による「口をすぼめる」という具体的な身体的反応を表現したとしている。これら酸味サンプルからの評価被験者による酸味の読み取りは、筆記被験者A・Bに対しては約2割、Cに至っては4割を超える結果となった。また、

筆記被験者Bが「口をすぼめるイメージ」を表現した、文字を半紙の中心に集めた酸味サンプルに関しては、評価被験者の約9割が「ミニトマト」あるいは「プチトマト」を連想したと述べている。筆記被験者Bにとっては文字を中心に集めることで酸味を意識した表現が、評価被験者にとっては文字の「小ささ」という要素が注目され、そのまま対象物の大きさとして解釈したことがわかる。書き手の意識と読み手の着目点のすれ違いが顕著な結果となった例である。

【グラフ2】 評価被験者が酸味を読み取ったとする要素



（評価被験者の回答より５つ以上の回答があった要素のみを表示）

【グラフ2】は、酸味サンプルに限らず全ての回答から酸味を読み取ったとする要素を抽出したものである。

全回答の中で「酸っぱい」との回答数は49であり、「甘い」の回答数80に比べると少ない。そのうち筆記被験者が意図する味覚と一致した回答数は酸味が36、甘味が46である。筆記被験者の意図と評価被験者の読み取りの一致度は酸味の場合7割を超え、甘味では6割を下回る。このことから、酸味を表現するParalanguage要素は、甘味に比べると個人間での差が比較的少ないのではないかと考えられる。

○苦味

筆記被験者A・Cは苦い「野菜のトマト」を、線を「太め」に「にじませ」ることで表現したとしている。筆記被験者Aはこの表現の意図を「口に残るイメージ」と述べている。筆記被験者Bは、酸っぱい「野菜のトマト」の表現と同様に口元の身体的反応をイメージしており、文字を半紙の下部に寄せて書くことで「舌を出すイメージ」を表現したとしている。加えて「食が進まないイメージ」を、線を「右下がり」にし「勢いをなくす」ことで表現したと述べている。このように、筆記被験者A・B・Cが比較的明確なイメージを持って苦い「野菜のトマト」を表現しているのに対して、苦味を読み取った評価被験者はごく少数であった。筆記被験者A・Bの苦味サンプルから苦味を読み取った評価被験者は1割に満たず、筆記被験者Cの苦味サンプルに関しては苦味を読み取った評価被験者は皆無だった。

苦い「野菜のトマト」を線の「太さ」と「にじみ」で表現した筆記被験者A・Cのサンプルに対しては、甘味を読み取った評価被験者が多く、筆記被験者Aの苦味サンプルで約3割、Cの苦味サンプルでは4割を超えている。筆記被験者Cの甘味サンプルと苦味サンプルは評価被験者による「甘い」という回答が同数値である。筆記被験者Aに関しては、甘味サンプルよりも苦味サンプルの方が「甘い」との回答が多いという結果になった。

この結果の要因の1つに、筆記被験者が用いた表現要素「太さ」「にじみ」に付随して文字全体が「丸み」を帯びたことで、評価被験者はむしろ副産物的な要素である「丸み」の方に注目した点が挙げられる。また、サンプルのLanguageが「野菜のトマト」であったことも要因として考えられる。本調査を行う際に、並行して「野菜のトマト」の味覚経験について質問したが、評価被験者が「野菜のトマト」を苦いと感じた経験は甘さ・酸っぱさに比べてはるかに少なく、全評価被験者中8人のみであった。この結果から、本調査においては「野菜のトマト」というLanguageの内容（意味）がParalanguageの内容（意味）よりも少し優位になっており、「苦い」という味覚がそもそも選択肢にはなかったのではないかとの背景が予想される。

○その他

評価被験者から得た回答では、「甘い」「酸っぱい」「苦い」以外の味の読み取りも記されている。特に、「甘酸っぱい」「おいしい」「濃い」「薄い」は多く見られた。他に、少数回答ながら「渋い」「まずい」「無味」等が挙げられた。さらに、味覚だけでなく視覚、聴覚、嗅覚、触覚で捉えたであろう感覚記憶に関する回答や印象によ

る回答、「野菜のトマト」というLanguageとは無関係な回答も複数得ている。中でも特徴的な回答を表2に列挙する。

表2　評価被験者から得た回答例

・さっぱり	・細長い	・高級な	・野菜ジュース
・青臭い	・赤い	・強い	・ケチャップ
・冷えている	・黄色い	・無農薬	・スープ
・みずみずしい	・腐っている	・無人販売店の	・煮物
・やわらかい	・つぶれている	・八百屋さんの	・ペペロンチーノ
・かたい	・完熟	・おじいちゃんが作った	・ガラスを噛んだような、キーンとしてヒヤッとする感じの味
・シャキシャキ	・野生の	・太陽をいっぱい浴びた	
・ざらざら	・つやつや	・井戸水で洗った	

○結果まとめ

以上の各味覚に関する分析結果から伺えるParalanguageと味覚の関係、及び書き手・読み手の意識に関する考察についてまとめる。

- 書き手の意識した表現要素及びその意図と、読み手の着目要素及びその読み取り方は必ずしも一致するわけではなく、書き手が意識的に表現したParalanguage要素に付随して表出された別のParalanguage要素の方が読み手の注目を集めることがある。
- 書き手は、味覚のイメージのみをParalanguageを用いて表現するのではなく、対象物（Language）とそれに関連する記憶を合成したものを味覚イメージとしてParalanguageという形に成形し表現する。
- 読み手がParalanguageを読み取る際に外部（紙面）・内部（記憶）から手繰り寄せる情報は、形や大きさ等の視覚的な類似性に基づくものから「農家のおじいちゃん」等の事実的な隣接性に基づくものまで幅広い。また、その情報は個人の視点や記憶に基づくものであるため、個々で持ち得る情報の内容が異なる。
- 同一人物が同じParalanguage要素に着目していても、同じ読み取りが行われるとは限らない。Paralanguage要素から意味の読み取りを行う際、読み手の状態や心境、既有の情報、Paralanguageの度合い等の様々な刺激から影響を受けるため、Paralanguage要素の意味の解釈は幅広いものとなる。

おわりに

本調査の結果から、個人差はあるもののParalanguageを用いた味覚表現及び読み取りは不可能ではないと考えられる。厳密な規則性はないものの、甘味には「丸み」、酸味には「鋭さ」という表現及び読み取りの傾向があり、書き手の意図に関わらずParalanguageはLanguageに対して補足的に機能する場合がある。ただし、評価被験者からの回答で得た「煮物」や「ペペロンチーノ」のように、ParalanguageからLanguageに無関係の意味を読み取り、Paralanguage機能によって伝達内容の支配がなされる場合もある。外見要素という芸術的な側面よりも、Paralanguageという言語として機能させる手立てを検証する必要がある。

本研究での調査は、「野菜のトマト」の甘味・酸味・苦味という3つの味覚に関するParalanguage要素を明らかにすることに特化した。味覚以外の感覚記憶へ刺激するParalanguage機能を調査する際は調査方法や質問項目に一考を要し、本調査は暫定的な検証として推論の域を出ないと考える。Language内容によっては、同じ味覚であってもParalanguageを用いた表現は異なることも予測される。調査対象のLanguageを多様化させることで、感覚記憶を刺激するParalanguage要素がより明確になる。今後の課題として考えたい。

1　豊口和士「「手で書く」ことに対するコミュニケーション論の視点」（『書写書道教育研究』第20号，全国大学書写書道教育学会，2005）pp.19-29

2　押木秀樹・渡邊愛沙・髙田詩織・伊藤由依「手書き文書におけるパラ言語的機能としての相手への感情の伝達と要素—好意の有無・相手の性別および字形・配列の効果—」(『書写書道教育研究』第27号，全国大学書写書道教育学会，2012) pp.40-49
3　押木秀樹「これからの書写書道教育学：内容論・教材論の立場から」(『書写書道教育研究別冊』創立20周年記念号，全国大　学書写書道教育学会，2006) pp.22-25
4　『ウィズダム英和辞典 第3版 特装版』三省堂，2013，p.1391　他
5　久保田ひろい「絵文字は何を伝えるか—携帯メールにおける絵文字のパラ言語的機能とテキストの構造化—」(『認知言語学論考』No.10，ひつじ書房，2012) pp.148-149
6　押木秀樹「これからの書写書道教育学：内容論・教材論の立場から」(前掲書) pp.22-25
7　豊口和士「「手で書く」ことに対するコミュニケーション論の視点」(前掲書) p.22
8　清水陽一郎・押木秀樹「書字における機能とその意識化による国語科書写指導—書字目的や文化的・社会的コードを中心として—」(『書写書道教育研究』第23号，全国大学書写書道教育学会，2008) p.75
9　押木秀樹・渡邊愛沙・髙田詩織・伊藤由依「手書き文書におけるパラ言語的機能としての相手への感情の伝達と要素—好意の有無・相手の性別および字形・配列の効果—」(前掲書) p.41
10　茂木健一郎『食のクオリア』」青土社，2006，pp.30-31
11　清水陽一郎・押木秀樹「書字における機能とその意識化による国語科書写指導—書字目的や文化的・社会的コードを中心として—」(前掲書) p.75
12『新版　家政学事典』(2004) 朝倉書店，p.506
13『広辞苑 第六版』(2008) 岩波書店，p.1194
14『家政学用語事典』(1993) 朝倉書店，p.25